

# 様式C-19

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月19日現在

機関番号：36301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21330047

研究課題名（和文）イギリス経験論の展開と経済学方法論—歴史的・理論的展開

研究課題名（英文）British empiricism and economic methodology

研究代表者

松井 名津（MATSUI NATSU）

松山大学・経済学部・教授

研究者番号：10320110

研究成果の概要（和文）：イギリス経済学における方法論を、演繹法と帰納法という二つの概念を中心として、各経済学者の方法論上の異同を明らかにするとともに、この二つの概念自体とイギリス経験論との相互関係を中心として、概念の含意を明らかにした。研究成果として『イギリス経済学における方法論の展開—演繹法と帰納法』を2010年に出版した。

研究成果の概要（英文）：We had been discussed about methodology of economics, especially in England. This research program had aimed to clear the differences and sameness between several economists, like Whately, Malthus, J.S.Mill, and so on, focused on deduction and induction. What we discovered were not only the difference of methodology but also the difference of meanings of those notions. We published “The development of methodology in British economics from the view point of induction and deduction” at 2010.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	5,600,000	1,680,000	7,280,000
2010年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2011年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
年度			
年度			
総計	13,300,000	3,990,000	17,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学説・経済思想

キーワード：経済思想史・科学方法論・ブリテン・経験論・哲学・科学史

### 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初において、我が国では経済学方法論は本格的かつ通史的に研究されることが少なかった。これは、17世紀あるいは18世紀から現代に足るすべての時代に渡り、か

つ多種多様な思想的時代的背景を持った経済学者のすべてを、同一の研究水準で網羅しつつ、全体像を描くことが、単独の研究者では困難であるというのが最大の理由である。我々はこうした困難に対して、共同研究が

ループを結成し、個別研究論文の集積にとどまらぬよう、共通テーマを「演繹と帰納」に設定して、共同研究を実施していた。その中で浮かび上がったのが、通常対立的に理解される演繹と帰納が、時代的社会的背景において、どのような含意を伴って使用されたのか。まだそのことが同時代あるいは後生の経済学者の研究を規定しながらも、どのようにして新しい方法論を生み出すに至ったかという問題と、イギリス経済学方法論を通底するイギリス経験論との相互作用の問題であった。

## 2. 研究の目的

共同研究を通じて「イギリス経済学」の方法論的特色・特長を明確化し、イギリス経済学発展の複合的相互連関的軌跡を明確にしてきた。本研究においては、次の3点を研究の目的とした。①イギリス経験論の通史的研究との相互対話を通じて、その時代の社会認識の争点を明確化する。②各時代のイギリス経験論の特色を明確化し、各研究大正における「経験論」あるいは「経験主義」の意味合いや位置づけを明確化する。③各個別研究を貫く通史的展望を得るための相互批判をおこない、統合的成果として書物にまとめる。

## 3. 研究の方法

本研究は研究グループメンバー各自の研究とその相互批判・検討を中心として行う。が、それだけでは閉鎖的な議論になる恐れがある。そこで、初年度にイギリス経済学方法論を中心とした国際シンポジウムを実施し、我々の研究計画や方向性を発表するとともに、内外の研究者からの批判を仰いだ。国際シンポジウム開催以降も、年2回のペースで研究会を開催し、各メンバーがその時点での研究内容を報告。また研究会には必ずたの研究者を招聘して新たな知見を得るとともに、それぞれが所属する学会のメーリングリスト等を通じて研究会の開催を事前に告知し、多様な研究者の参加を促した。

また研究グループメンバーが地理的に散在していることから、ムードルシステムを使用して、研究会前後でのレジメやディスカッション記録の保存、議論の継続、連絡の徹底をはかった。

研究内容が閉塞的にならない手段として、さらに、研究グループメンバーが積極的に海外学会での報告を行い、海外の研究者とのディスカッション並びに交流を深めた。

## 4. 研究成果

初年度：嘉悦大学での国際シンポジウム (Economics and Philosophy in the British history of Economic Thought) の開催

報告者および論題

James Alvey (Massey University, NZ)  
: Ethical Foundations of Adam Smith's Political Economy  
Comment: Chikakazu Tadakoshi (Yokohama City University)

Nobuhiko Nakazawa (Kansai University)  
: The Political Economy of Edmund Burke; A New Perspective  
Comment: Hiroaki Itai (part-time lecturer, Aoyama University)

Shin Kubo (Kaetsu University)  
: The Scope and Method of Political Economy in the Earliest Historiographies of the Subject; From D.Stewart to J.R.McCulloch  
Comment: Shigeyoshi Senga

Tony Lawson (Cambridge University, UK)  
: Doing Economics Differently  
Comment: Kensuke Sasaki (Hokkaido University) & Akinobu Harada (Sapporo University)

パネルディスカッション

方法論研究への歴史的アプローチと方法論研究の現代的課題

Chair: Susumu Egashira (Otaru University of Commerce)

2年度：只腰・佐々木を編集者とする『イギリス経済学における方法論の展開-演繹法と帰納法-』の出版

なおこの書籍は研究グループメンバーの個別論文のみならず、これまでの研究会の集大成として、一つの論文に対して、グループメンバー2人が相互にコメントを寄せる形をとった。これはこれまでの研究会の討議を反映させるものであると同時に、読者に対して多様な読みの可能性を提示するものとして試みたものである。

また関西学院大学井上琢智氏による書評が寄せられるなど、学会内外で早くから注目を受ける結果となった。

最終年度：当初の計画では最終年度に研究成果を書籍の形にまとめることとなっていたが、計画より前倒して目的を達成した。このため最終年度では、完成した書籍に寄せられた相互コメントや書評、また学会での評価等を参考に、新たな共同研究の方向性を探る研究会を重ねることとした。この方針に沿って、この年どの研究会では神学と経済学の関係性を探究する松本哲人氏や、現代経済学方法論を探究する原谷直樹氏、また、ケインズ研究を主として統計的推測から担当していた

原田氏の急死を受け、統計的推測やマクロ経済学の動向を探求する廣瀬弘毅氏を招聘した研究会を重ねた。

こうした研究会等の結果、以下のような課題が提起された。

①「経験論」と一括されている概念に関して、演繹法や帰納法と同じく、時代や論者による異同を明らかにしていく。

②「経験論」が経験という基盤を共有するとして、経験を形成しているもの（感覚データ等）の不確実性の問題をどう考えていたのかを明確にする。

③社会的文脈の中で、経済学方法論や経済学自体がどのような影響や位置づけを受けていたのかを明確化する。

④経済学が持つ事実記述的側面と規範的側面の相互関係を明らかにする。

⑤観測機器の発達が自然科学に与えた影響が、社会科学においてもあり得る。特にデータ処理における進歩と経済学方法論の関係を明確化する。

以上のような課題は、非常に多岐にわたり、論点が拡散する恐れがあるので、①認識論的観点を中心とする哲学的次元、②事実と機関を扱う規範論的次元、③自然科学や数学、統計学の経済学への導入を取り扱う自然科学的次元、④経済学における社会学的制度的背景を取り扱う社会学的次元の4つの観点に整理し、研究会を継続することとした。

なおこうした新しい枠組みの設定および研究方向の深化にとともに、これまでも研究メンバー主催の研究会に報告者・討論者として出席していた廣瀬弘毅氏ならびに原谷直樹氏を研究メンバーとした。また上記4次元に関して、それぞれの担当を以下のように定めた。

#### ①哲学的次元

経験と事実：松井名津

因果性と相互依存性：佐々木憲介

モデルと実在：原谷直樹

#### ②規範論的次元

経済学と倫理学：只腰親和

競争の規範的評価：中井大介

経済学方法論と経済政策論：中澤信彦

#### ③自然科学的次元

経済学と数学・統計学：上宮智之

構成主義的アプローチ：江頭進

#### ④社会学的次元

経済学の制度化過程：久保真

ケインズ以後の経済学界：廣瀬弘毅

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

① 江頭進「ハイエクとシカゴ学派 ―方法論と自由主義―」、『経済学史研究』,

53:2,2012年,41-58。査読有。

② Yamamoto, K. and S. Egashira, Marshall's Theory of Organic Growth, European Journal of History of Economic Thought, 19:1,2012年,1-20。査読有

③ 久保真,マルサス『初版 人口論』―スコットランドおよびケンブリッジの伝統との関連において,マルサス学会年報,21巻,2012年,99-126。査読有。

④ N.Nakazawa, The Political Economy of Edmund Burke: A New Perspective, Modern Age: A Quarterly Review, 52:4,2011年,285-292。査読有。

⑤ N.Matui, J.S.Mill on the Poetic Spirit and the Method of Science, Osaka City University Economic Review, 24, 2011年, 3-25。査読無。

⑥ 只腰親和,ハチスン『探求』におけるニュートン的方法の問題,佐々木武・田中秀夫編著『啓蒙と社会―文明観の変容』京都大学出版会:2011年,159-186。査読無。

⑦ 佐々木憲介, J.E.T.ソロルド・ロジャースにおける歴史の経済的解釈, 経済学研究, 61:1/2, 北海道大学, 2011年, 1-20。査読無。

⑧ Shigeyoshi Senga, Early Ricardo's Theory of Profit :From Two-Sector Approach to Value Theory, 経済学史研究, 52:2, 2011年, 27-45。査読有。

〔学会発表〕(計6件)

① KUBO Shin, From J.-B. Say to D. Stewart and J. R. McCulloch, The History of Economics Society, 2011. 6. 20, The University of Notre Dame

② KUBO Shin, The Scope and Method of Political Economy in the Early Nineteenth Century, History of Economic Thought Society of Australia, 2010.7.8, The University of Sydney

③ 中澤信彦, 生存権・福祉国家・共和主義―バークとペインとの論争を再考する― 経済学史学会第59回回関西西部会(於大阪学院大学), 2010.11.27

〔図書〕(計5件)

① 佐々木憲介・只腰親和編著『イギリス経済学における方法論の展開―演繹法と帰納法』昭和堂, 2011年。(本プログラムの成果であり、全員が執筆を担当)。391。

② 中井大介『功利主義と経済学―シジウィックの実践哲学の射程』, 晃洋書房, 2009年(2010年経済学史学会研究奨励賞受賞)。217。

〔その他〕

①上宮智之「エッジワースの功利主義論と  
経済学—不平等性の功利主義—」，関西学院  
大学大学院経済学研究科博士学位申請論文，  
2012年

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

松井 名津 (Matsui Natsu)

松山大学 経済学部 教授

研究者番号：10320110

### (2)研究分担者

中澤 信彦 (Nakazawa Nobuhiko)

関西大学 経済学部 教授

研究者番号：40309208

只腰 親和 (Tadakoshi Chikakazu)

横浜市立大学 総合科学部 教授

研究者番号：60179710

久保 真 (Kubo Shin)

嘉悦大学 経営経済学部 准教授

研究者番号：30276399

佐々木 憲介 (Sasaki Kensuke)

北海道大学 人文科学研究科 (大学院)

教授

研究者番号：50178646

千賀 重義 (Senga Shigeyoshi)

横浜市立大学 国際総合科学研究科 教授

研究者番号：20036057

中井 大介 (Nakai Daisuke)

近畿大学 経済学部 准教授

研究者番号：70454634

江頭 進 (Egashira Susumu)

小樽商科大学 商学部 教授

研究者番号：80292077

上宮 智之 (Uemiya Tomoyuki)

大阪経済大学 経済学部 講師

研究者番号：80580828

原田 明伸 (Harada Akinobu)

札幌大学 経済学部 教授 (2010年死亡)

研究者番号：90189697